

海外研修印象記

広島大学大学院医系科学研究科

猪村 剛史

2026年6月6日～15日の10日間、ドイツ（ハノーファーおよびケルン）での研修の機会をいただきました。ハノーファーでは、Medical School Hannover at DIAKOVERE Annastift Hospital、Ottobock 本社および Ottobock.care を訪問し、ケルンでは、Kliniken der Stadt Köln gGmbH、RehaNova Köln での研修の機会に恵まれました。

主たる研修先である Medical School Hannover at DIAKOVERE Annastift Hospital では、C-Brace の症例を数多く経験されている Prof. Dr.med. Bernd Brüggengjürgen を訪問し、様々な施設内見学を通して、ドイツ国内におけるコンピューター制御長下肢装具の普及状況や臨床での活用方法に加え、ドイツの医療保険制度、義肢・装具の提供体制などについて、臨床・学術の両側面から幅広く知識を得ることができました。さらに、Prof. Bernd の調整により、Ottobock 本社および同社が運営するケア施設である Ottobock.care を訪問する機会をいただきました。最新の義肢・装具技術を実際に見学するとともに、製品開発から臨床での活用に至るまでの流れについて多くの示唆を得ることができました。

Kliniken der Stadt Köln gGmbH では、ドイツにおける急性期の脳神経系外科治療について学ぶとともに、実際の急性期理学療法場面を見学することができました。その中で、急性期から装具を含むテクノロジーをどのように活用し、早期の離床や歩行再建に繋げていくかについて具体的な議論を行うことができました。また、同敷地内にある RehaNova Köln では、発症後4～6週間程度の入院リハビリテーションの現場を視察し、リハビリテーション科医、作業療法士、言語聴覚士と直接意見交換を行うことができました。職種間の連携や患者の社会復帰を見据えたリハビリテーションに触れ、日本との共通点および相違点を考える貴重な機会となりました。

今回の研修を通して、ドイツにおける義肢・装具、さらにリハビリテーションの先進的な取り組みを学ぶだけでなく、テクノロジーを患者の生活や社会参加に繋げる方策について多くのことを学びました。今回の海外研修で得られた知見や人脈を、今後の活動に生かし、日本国内における、より良い装具療法の発展に繋がるよう尽力したいと考えております。この度は、義肢・装具分野の先進国の一つであるドイツにおいて、海外研修の貴重な機会を賜り、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



写真：Medical School Hannover at DIAKOVERE Annastift Hospital